

青年期問題行動に対する 問題性の認知についての研究

長谷川 博一

I 問題意識

青年期は疾風怒濤の時期といわれる。それは、子供時代の終焉とともに突然つきつけられる身体的社会的要請の中で、青年自らが試行錯誤的に大人社会の一員としての自己を確立していく姿の反映である。この過程で生じるさまざまな行動が、時に社会的常識を逸脱していると評価される青年群がある。しかしこれらも、意図的ではないにしろ青年なりに社会的適応を指向した態度の現れであるとみなされる。発達あるいは臨床心理学的観点である。

一方で、社会問題として青年の問題行動が取り上げられる。校内暴力、家庭内暴力、いじめといった問題が巷間をにぎわした。中でも登校拒否（近年は不登校と呼称される傾向にある）は、一貫して取り上げられ、そしてなおその出現率は増加の過程にあり、深刻さを増す一方である。しかし、これら社会的に理想とされる青年像を基準として問題性を定義していくと、青年なりに適応していこうとする積極面はみえなくなってくる。

現代青年の呈する問題行動を検討していく上で明確にされるべき第一の点は、対象とする問題の分類に関するものである。既述した家庭内暴力や登校拒否などは、現象の呼称であって、問題の本質をうまく表現しているかどうかの妥当性に欠けている。この点に関しては、高校生の行動リストの因子分析による

分類から「奔放」「対抗」「意識」「無為」（以上男女共通4因子）、「強迫」（男子固有因子）、「身体」（女子固有因子）の6つの問題を提唱した（長谷川、1990）。これに従うと、たとえば不登校は、その心理機制を考慮することで、いずれの因子へも分類が可能となる。

第二に重要な点は、青年の示す行動の中の問題性を、常に人格の健康性との関連でみていかねばならないことである。健康性に関する概念規定に課題は残る中で、Rogers(1951)やErikson(1959)以来、自己概念の健全さをその指標とするのがひとつの有力な立場であろう。問題行動因子と自己評価的意識との関連を調査した結果（長谷川、1991）や、充実感や自立感、連帯感などの自己適応感との関連を調査した結果（長谷川、1992a, 1992b）から、否定的（不健康）な自己概念にもっとも関連している問題は「無為」であり、「奔放」の問題は、むしろ肯定的方向性をもって理解すべきであることが示唆された。これらの意味するところが、果たして社会通念上の価値基準とどの程度一致するのであろうか。

これまで、問題行動に対する認知を、認知者の違いにおける差異の観点から扱った研究はきわめて少ないといえる。そのような状況の中で、白井(1992)は、自作のSD法尺度を用いて登校拒否児に対する青年、大人、教師の認知を調べ、共感的態度と評価的態度において群間差があることを示した。また、登校拒否児への態度は、登校拒否児への関与体験

により変化した。

本論文では、登校拒否に限らず、青年（高校生）のさまざまな問題行動に対して、社会の構成員がどのように問題視しているのかについて実証的データをもとに検討する。まず調査Aでは、一般の中学生、高校生、大学生、母親、教員の認知の差異を示す。次に調査Bでは、心理臨床家の認知の特徴を示す。最後に調査Cで、問題傾向のある青年自身の見方を明らかにしていく。これらの調査に一貫して用いる「問題行動」という語には、「本質的に問題であるかどうか」という次元とは独立させ、社会通念上（一般成人により）問題性を指摘される行動や態度のすべて」という意味しか与えない点に注意すべきである。実際には、上述した問題行動因子を対象とする。

II 調査

調査A：一般青年、母親、教師のもつ問題性認知の比較

(1) 目的

ここで紹介するのは、小澤（1992,未公刊）のデータを再分析したものである。一般青年群と大人群の、青年の行動に対する問題性に関する認知の差異を明らかにする。社会的枠組みは後者によって形成されたものであるから、青年自身の認知とのずれが大きければ、それは青年にとってきわめて不幸な事態となる。

(2) 方法

小澤（1992,未公刊）の方法については、一部は長谷川（1992c）に記述した。

今回報告するデータは、青年群として中学生100名（男49、女51）、高校生97名（男46、女51）、大学生100名（男50、女50）、大人群として中学・高校生を子に持つ母親100名、中学・高校教師97名（男77、女20）の、5群計494名分である。

取り上げる問題行動尺度は、調査B以降と同一条件にするため、「奔放」「対抗」「身体」

「意識」「無為」の5因子とし、行動リスト（項目）として、長谷川（1989,1990）の項目から各因子とも負荷の高い5項目を抜粋した簡略版（25項目）を用いた（Table1）。

教示は「高校生の示す行動として問題であると感じますか」で、「問題である」「少し問題である」「問題でない」の3段階評定を用いた。

Table 1 問題行動尺度（簡易版）の因子と項目

因子	項目
奔放	友達の家に泊まりに行くことがある 頭髪や制服などの校則は守らない方である ディスコやゲームセンターに行くことがある 勉強以外のことで夜遅くまで起きていることが多い 学校に内緒でアルバイトをする
対抗	嫌いな授業には出なかつたり遅れていつたりすることがある 学校で暴れて、物を壊したり人を傷つけたりすることがある よく人とけんかをする 学校で先生によく叱られている 学校で他の生徒をいじめることがある
身体	学校を欠席することが多い 学校へ行く前に、身体の調子がおかしくなることがある 身体が弱く病気がちである 男(女)友達とデートをすることがたびたびある (女生徒が)時々お化粧をする
意識	死んでしまいたいと思うときがある 誰にも相談できない悩みがある 両親のことがとても嫌いである 学校を変わりたいと思っている 学校にとっても仲の悪い友人がいる
無為	家ではほとんど勉強しない 学校以外にはあまり外出しない 趣味はほとんどない 家ではテレビを見ながら寝ころんでいることが多い 人に自慢できるような得意なものが何もない

(3) 結果と考察

それぞれの項目に対する回答の「問題である」方から順に3点～1点を与え、群別に因子ごとの平均値を算出し、それを問題視得点とした。その群別の結果をプロフィールとしてFig. 1に示す。問題視得点2は「やや問題である」を、得点が3に接近するほど問題視の程度は高まり、得点が1に接近するほど問題視しなくなることを意味している。

さらに、高校生以外の群について、行動の主体である高校生群の問題視得点からの差異得点を求め、Fig. 2に示した。

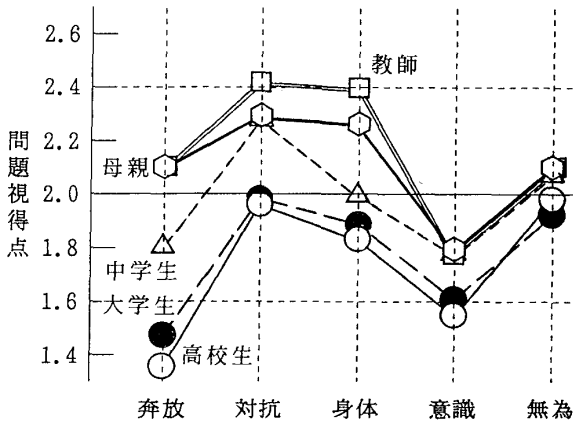


Fig. 1 青年3群、母親、教師による問題視プロフィール

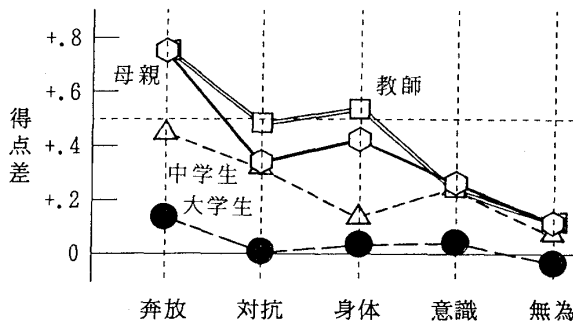


Fig. 2 高校生と各群の問題視差異プロフィール

これらからまず、母親と教師、高校生と大学生の問題視の仕方がきわめて類似していることがわかる。全体的に大人群が問題視の程度が高く、特に「奔放」と「対抗」「身体」において差が大きくなっている。中学生の見方は、高校・大学生群と母親・教師群のほぼ中間型であるといえる。

母親と教師が問題視するのは、逸脱行動あるいは身体症状として、青年に生じている現象が外在化し観察されやすい領域である。このことは、母親や教師が青年に対し、(望まれる青年としての) 社会化へと導いていかねばならない立場にいることを念頭におくと理解しやすい。大人の要求する社会化というのは、大人社会のルールを遵守し、対人関係を円滑に営める能力であって、そのことは没個性化をも意味するものである。内向化される領域の行動や態度に対しては、大人の問題視得点が高くないことも、同様な視点から理解でき

る。それらの行動は、少なくとも集団全体としての違法性を阻害しないので、見落とされやすいのであろう。

さらに、「奔放」の行動について、青年群と大人群の問題視得点の差が大きいことに言及しておく必要がある。高校生による問題視得点が1.35であることは、彼らが、外泊したり、頭髪や制服を規定どおりにしなかったり、遊戯場へ行ったりすることを、「いけないことではない」と認識していることを示し、母親と教師のその得点が2.10であること、つまり大人は「いけないことである」と認識している事実とのはっきりとした不一致をみせているのである。「いけないことではないのに、大人はそれをいけないという」といった高校生の認識は、彼らの中に大人への不信感を生じさせているであろう。このような感情のもとでは、大人による教育的働きかけが効を奏するとは考えにくい。

次に、中学生が高校・大学生群と母親・教師群の中間的認識をもっていたことについて少し触れておこう。これは、中学生の価値判断の基準が、大人のその域からいまだ脱していないことの反映であろう。児童期までの子供は、大人(主に両親)の基準は半ば絶対的なもの(当たり前なもの)として認知され受け入れられる。青年期に入ると、自己意識が高まるに従い、これまで無批判的に受け入れてきた価値基準に疑問符をつけ、自己内に芽生えた基準との照合と確認行為(これが問題行動とみなされる場合がある)が行われるようになる。今回得たデータは、中学生期から高校生期への移行における、価値基準のシフトを反映していると考えられる。青年後期以降は、最終的に大人社会への仲間入りを果たす、つまり社会の価値基準を自己の基準と同一化させることで準拠性を実感していくことになるが、それが大学生の問題視得点(特に「奔放」因子)で若干の大人群寄り傾向を示していることに表されているのかもしれない。

最後に、「いいことと悪いこと」の価値判断

を、所属する社会に準拠する度合いに関する発達モデルを、Fig. 3 に示す。

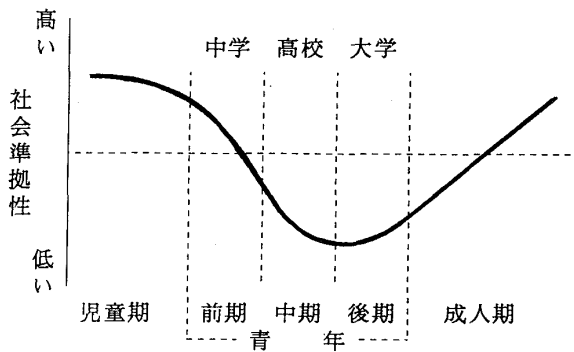


Fig. 3 価値判断の社会準拠性に関する発達モデル

なお、(母親群を除く) 男女差については、どの群もすべての因子で女子の問題視得点が高く、有意な t 値を示すものも多かった。これは、測定の対象となった女子の問題行動傾向が、男子に比べて低いことに連関していると推察される。

調査B：心理臨床家の問題性認知の特徴

(1) 目的

調査Aでは、高校生と大人(社会)の間で、外向化した問題行動に対して認知のずれの大きいことが示された。ここでは、心理臨床家の問題行動因子に対する見方を明らかにする。心理臨床家は、心理臨床学の理論的研修と実践を積み、青年の呈する問題の意味と処遇に関して、より本質に近い理解の枠組を有するものと考えられる。そして、ここで得られた臨床家の問題性のとらえ方と、調査Aで示された一般集団5群におけるとらえ方を比較検討する。

(2) 方法

調査対象である心理臨床家は、某国立大学付属の外来用相談機関である心理教育相談室の相談員とした。調査形態は郵送調査である。40名に対して調査依頼書と調査票、返送用封筒を発送したところ、29名(男13名、女16名、

回収率72.5%)の返送をえた。年齢幅は22才~48才(平均31.1才)、臨床経験は1年~25年(平均7.0年)であった。

調査Aと同一の問題行動リスト25項目について、まず「心理臨床家の立場から、高校生の行動として問題であると感じるかどうか」を3件法で評定し、次に補足的に、「もし心理臨床家とは別の個人の立場からみた場合に、感じ方が異なる項目があれば、それについても再評定する」と依頼した。

(3) 結果と考察

調査Aと同様な方法で、心理臨床家としての因子別問題視得点を算出した。全評定者の因子別平均問題視得点は、「奔放」1.30、「対抗」2.13、「身体」1.92、「意識」1.74、「無為」1.78であった。そのプロフィールを、調査Aで得た高校生のデータとあわせてFig.4に示す。それによると、心理臨床家の問題視プロフィールは高校生のものときわめて類似していることがわかる。つまり、心理臨床家が、行動の主体者である高校生(臨床場面ではクライアントということになる)の認知スタイルに共感できていることを意味しているものといえよう。これは、カウンセラーに必要とされるの基本的態度の一つの現れでもある。

また、調査Aで得られた他の4群の得点プロフィールもあわせて総合的に比較すると、心理臨床家が「無為」の因子を問題視していないことも指摘すべきであろう。これは、青年期の内閉に対し、「やがて羽化を待つさなぎの時期(山中, 1982)」あるいは「エネルギー充電の時期」などと積極的に評価する姿勢の反映である。つまり、「何もしない」というその時の現象面ではなく、潜在性、可能性といった、予後に関心を抱いているということである。これらの姿勢は、「今この時」の社会適応をめざす教師や親の姿勢と一致しない点でもある。

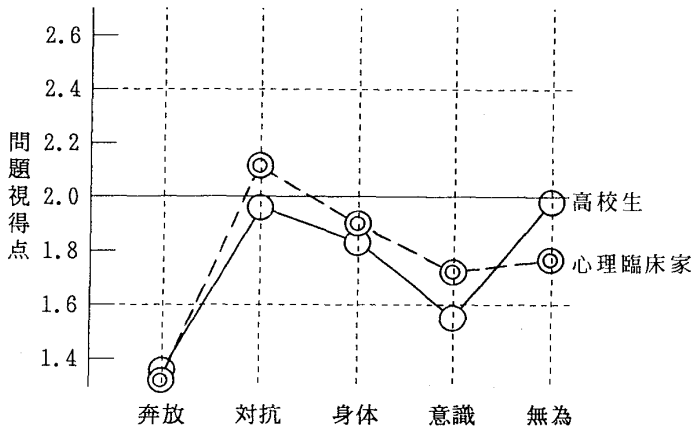


Fig. 4 心理臨床家と高校生の問題視プロフィール比較

次に、臨床経験4年以上を熟練群(17名—男11,女6)、4年未満を未熟練群(12名—男2,女10)とし、両群の因子別問題視得点の差を検定した(Table 2)が、いずれの因子においても群間差は認められなかった。しかし、すべての因子で、熟練者の問題視得点の方が少しづつ高いという一貫した傾向が得られている。

Table 2 心理臨床家の熟練群と未熟練群の問題視得点

		熟練群(17名)	未熟練群(12名)
問題視得点	奔放	1.33 (.28)	1.27 (.26)
	対抗	2.18 (.37)	2.07 (.35)
	身体	1.93 (.39)	1.90 (.33)
	意識	1.79 (.46)	1.68 (.38)
	無為	1.81 (.33)	1.73 (.26)

臨床家としてではない個人としての問題視得点をみると、心理臨床家としての評価と異なる回答をした者は11名(全体の37.9%)で、うち男子は3名(23.1%)、女子は8名(50%)と、女子でその比率が高い傾向にある。男女込みの因子別問題視得点の変動についてはTable 3に示した。「身体」の因子では視点が変化しても比較的安定(変動は2名のみ)していたが、そのほかの因子ではプラス(問題視得点上昇)方向に変動する傾向にあることが示されている。しかし、熟練度によっては評価値の変動に明確な差異は示されなかった。臨床経験を積んでいくと人格(生活)全

体が心理臨床の姿勢に染まってくる、という予測は、本データからは示されなかった。

Table 3 心理臨床家による臨床家から個人への視点の変化に伴う問題視評価の変化(人数)

問題行動因子		奔放	対抗	身体	意識	無為
問題視得点	上昇	3	4	1	5	5
	不変	24	23	27	21	23
	下降	2	2	1	3	1

調査C：青年の問題行動傾向と問題性認知の関連

(1) 目的

調査Aでは青年群を平均的青年として一括に扱ったが、ここでは青年を問題行動傾向の高低によって統制して、それに対する認知(問題視)との関連性の検討を行う。はたして、問題傾向の高い青年はその問題に対して寛容であり、問題性の意識に欠けるのだろうか。またそれは問題の内容(因子)によって異なるであろうか。

認知と行動の両変数に正の関連が示されれば、「その行為に対して問題性を感じていないからそう行為する」というひとつの要因論的考察が可能となる。

(2) 方法

測定対象概念である問題行動は高校生を主体として構築されているが、調査実施上の制約から、調査は大学生に対して実施した。有効被調査者は、大学生2、3年生女子126名(年齢19才~22才)で、ほぼ同じサイズの2つの集団において無記名集団法で実施した。

調査票は、調査A、Bと同一の行動リスト25項目への自己行動評価(用紙表)と、行動リストに対する問題視評価(用紙裏)で構成された。まず自己の行動評価においては、リストの表現を過去形に変え、「高校生時代の自身にあてはまるかどうか」を「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を

求めた。次に用紙を裏返し、各行為に対して「問題であると感じるかどうか」を、調査Aと同様に3件法で評定を求めた。自己行動評定から問題視評定への移行に際して、「自身の行動がどうであったかどうか関係なく」、また「自身の行動についての回答(用紙表)は一切参照しないで」回答するよう教示した。

(3) 結果と考察

高校生時代の自己の行動については、それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」に5点から1点を与え、因子別に合計して、それを被調査者の問題行動傾向得点とした。問題視得点は、調査A、Bと同様に算出した。まず、被調査者自身の問題行動傾向の評定結果について、尺度項目の内的整合性をみるために、 α 係数を算出した(Table 4)。 α は.49から.66に至る値で、レトロスペクティブに実施する尺度としての信頼性はそれほど高いものとはいえなかった。

Table 4 問題行動傾向得点の因子別の α 係数

	奔放	対抗	身体	意識	無為
α 係数	.5603	.6316	.6249	.4877	.6621

次に、問題視評定尺度の安定性を検討する意味からも、調査Aで得た大学生のうち女子(N=50)のプロフィールとここでのプロフィールを比較してみた(Fig. 5)。今回の調査で得た問題視得点(カッコ内は調査Aの女子大学生の得点)は、「奔放」1.51 (1.61)、「対抗」2.39 (2.19)、「身体」2.05 (2.09)、「意識」1.96 (1.63)、「無為」1.93 (1.93)で、どの因子においても群間差はみられず、類似したプロフィールを呈しているといえる。

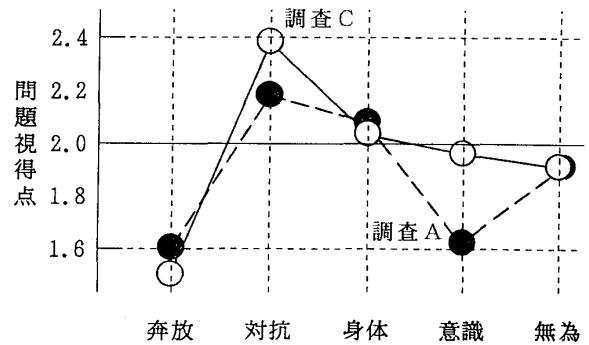


Fig. 5 調査Aと調査Cにおける大学生女子の問題視プロフィール

Table 5 問題行動傾向得点と問題視得点の相関係数

問題視	奔放	対抗	身体	意識	無為
問題視 奔放	-.11	-.03	.06	.09	.03
問題視 対抗	-.07	-.04	.11	.11	.00
問題視 身体	-.24*	-.13	-.19*	.19*	-.14
問題視 意識	-.11	-.16	-.17	-.22*	-.16
問題視 無為	-.02	.07	.06	.09	-.16

(N=126) * P<.05

次に、両評定値間の関連を相関係数としてTable 5に示す。全体的に相関係数の値は小さいが、5%水準で有為な値が、「身体」の問題傾向因子と問題視得点の関係で3つ、「意識」の問題傾向因子との関係で1つみられた。この2つの問題傾向因子得点は、ほとんどの問題視得点との間で、有為な程度ではないが一貫して負の相関係数を示している。しかし、身体の問題傾向と意識の問題性認知間では有意な正の相関がえられた。有意な相関係数が示された2つの問題傾向については、その問題傾向因子の得点からサンプルを高群、中群、低群に分け、高群と低群で問題視プロフィールを比較した(Fig. 6, 7)。群間差をt検定した結果でも、いくつかの因子で有意差(図中、*)が示されている。

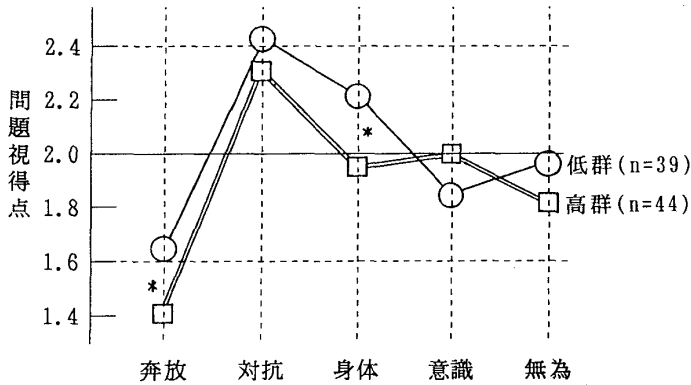


Fig. 6 「身体」の問題傾向の高い群と低い群の問題視プロフィール

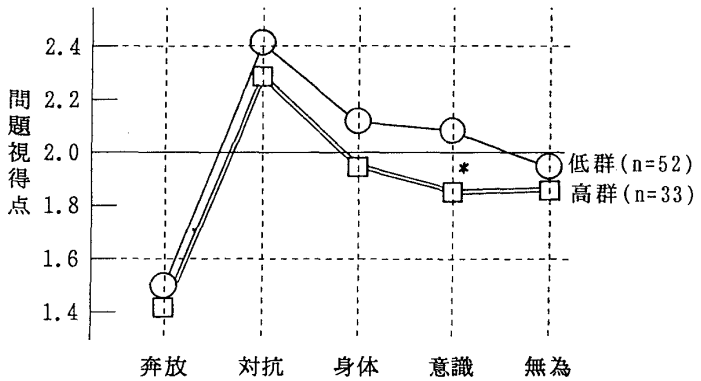


Fig. 7 「意識」の問題傾向の高い群と低い群の問題視プロフィール

これらの結果について説明すると次の通りになる。まず、「身体」の傾向の強い青年は、「奔放」「身体」の問題について「問題でない」と認知しするのに対して、「意識」の問題については「問題である」と認知している。また、「対抗」や「無為」に対しては否定的な見方をする傾向にある。そして、「意識」の傾向の強い者は、「意識」の問題を中心に、やはり全般的に問題視の水準が低い傾向にある。

次に、両変数の問題領域（因子）を対応させて相関係数をみると、「奔放」は -0.11 、「対抗」は -0.04 、「身体」は -0.19 、「意識」は -0.22 、「無為」は -0.16 であった。明確ではないが、ある問題領域の傾向が高いと、その問題に対する問題性の認知が低くなる傾向がうかがえる。問題行動生起のメカニズムとして問題性の認知が関与していることを示唆する結

果であろう。

「身体」の問題傾向を有する者が、問題行動全般に対して問題視しない中で、「意識」に対してだけは問題視している点は興味深い。これは、身体症状化されることが、主観的に体験される悩みや苦痛、困難といった意識に対してカタルシスの効果をもち、結果的に本人はそのような意識体験をもたないため、それらに共感できないためではないだろうか。

行動と認知の関連をみるという本調査と同じ視点から、吉元は（1986）は、小学生から高校生を対象に、問題行動にたいする認知として非行への共感度を取り上げ、実際の非行経験との関連を調査している。そして、多くの行動で、中程度に高い正の相関係数が示された。問題行動を行う者の気持ちがわかる（＝共感度が高い）ということと、その問題に対して問題性を感じないということは、厳密には区別されるべきものであろうが、問題行動に対する認知のあり方が行動の説明変数となることを示したという点で一致をみているといえよう。しかし、認知が行動を規定しているのか、それとも行動の結果、認知の変容がもたらされたのかについては、現在のところ定かではない。

III 全体的考察

—— 大人の認知が青年に及ぼす影響 ——

自尊心が青年や児童の適応にとって非常に重要な要因であることは、多くの研究者によって広く受け入れられている。Pope, A.W.他（1988）は、問題を示す青年・児童の治療プログラムとして、自尊心をたかめる手続きについて述べている。その中で自尊心は、社会、学業、家庭、身体イメージ、全般的自尊心という5つの領域からとらえることを提唱しているが、社会や学業、家庭における自尊心というのは、いずれも他者が自分をどうみているかということの認知によって、自然と形成されるものであろう。

問題行動を示す青年に対しては、前章でみてきたように、教師や親の問題視の程度が高

く（それは青年自身による見方と大幅にずれていたが）、そのことは青年の否定的な自尊心を形成する要因として作用するであろう。そして、自尊心の低下がますます青年の不適応を助長するといった悪循環に陥ってしまう。逆に、同じ行動傾向にある青年はその行動を問題視しない（調査Cの結果）ので、それら仲間と接する空間においては自尊心は傷つけられることはなく、類は類をよぶがごとく集団内に閉鎖してしまう結果を招くであろう。

したがって、教師や親は、現状の意識をもって青年に接しては、たとえそれが教育的配慮のもとであってもそれは錯覚にすぎず、むしろ弊害となりかねないと思われる。

同じような警鐘は、1968年の Rosenthal, R., & Jacobson, L. による「教室のピグマリオン」にも求めることができる。彼らは、年度の初めに、知能テストの結果「1年間で大きな学力の向上が期待できる」と判定された子どもが、実際に、年度の終わりに他の生徒よりも高い知能の伸びをみせたことを、実験的に示した。

Brophy, J. E., & Good, T. L. ら(1974) は、ピグマリオン効果に関して誇大評価がなされていると批評しながらも、その後の多くの追試から、「教師の期待は、循環的で相互に強化的な一連の出来事を生じさせる」ことは確かであると述べている。この効果は、自己成就予言効果と称されたりする。つまり、教師が生徒に対してある種の期待（肯定的なものにせよ否定的なものにせよ）を持つと、その期待によって教師の生徒への行動の仕方が規定され、結果的に生徒は教師の期待した方向で反応するようになる。教師はその反応を観察することで、ますますその生徒に対する自己の期待（認知）を強固なものへと完成させていくといった循環である。

これと同質の現象が、家庭内の期待効果として存在していると考えられることも、あながち飛躍的なことではなからう。親が、兄弟間で差別的な態度を示すことは、多くの臨床報告からも明らかである。出来の悪い兄（姉）と

優秀で従順な弟（妹）、というパターンもそのひとつである。多くの場合、まったくの母親側の心的構えの問題（たとえば、長子に対しては神経質になり、ささいな問題も過大視されやすい）か、あるいはほんのささいな兄弟間の差異に発端を見いだすことができよう。それが母親の差別的な認知を生じ、子どもがその認知にそった反応をし、さらに母親の期待の差別を増強させるといった一連の強化的連鎖である。これらの推論は、素質的には同一の一卵性双生児が長子的・次子的性格を有するという三木・天羽（1954a・1954b）の古典的研究にも、根拠を求めることができよう。

調査Aの結果は、母親や教師は青年の行動に過度に否定的な認知をもっていることを示した。これが、自己成就予言的效果をもつことは十分に予測されるが、まさにこれは社会心理学でいう「ラベリング効果」に他ならないであろう。一方で、心理臨床家は主体である青年の認識に近い認知様式をもっており、心理臨床家による臨床的かわりによって悪循環が絶たれ、青年の自己意識が肯定的に変容し、適応的行動が発達していくというメカニズムが理解されやすい。

文 献

- Brophy, J. E., & Good, T. L. 1974 Teacher-Student Relationships—Causes and Consequences. 浜名他（共訳） 教師と生徒の人間関係 — 新しい教育指導の原点 — 北大路書房.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle, Psychological Issues No.1, Monograph 1. 小此木（訳） 自我同一性 — アイデンティティとライフサイクル — 誠信書房.
- 長谷川博一 1989 青年の問題行動傾向の構造 — 女子学生についての調査結果 — 名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, 4, 127-133.
- 長谷川博一 1990 青年期男女にみられる問題行動傾向の構造 東海女子大学紀要, 9, 75-85.
- 長谷川博一 1991 青年期における問題行動傾向と自己評価的意識 東海女子大学紀要, 10, 109-116.

- 長谷川博一 1992a 青年期問題行動と自己適応感からみた心理的健康のかかわり 日本健康心理学会第5回大会発表論文集, 90-91.
- 長谷川博一 1992b 自己評価の意識からみた心理的健康 東海女子大学紀要, 11, 213-231.
- 長谷川博一 1992c 青年期問題行動に対する認知についての研究 日本心理学会第56回大会発表論文集, 300.
- 三木安正・天羽幸子 1954a 兄的性格と弟的性格 — 双生児研究1 — 教育心理学研究, 2, 1-10.
- 三木安正・天羽幸子 1954b 双生児にみられる兄弟的性格差異と家庭での取扱い方 — 双生児研究2 — 教育心理学研究, 2, 13-21.
- 小澤和枝 1992 (未公刊) 青年期問題行動に対する認知の研究 東海女子大学平成3年度卒業論文.
- Pope, A.W., & McHale, S.M., & Craighead, W.E. 1988 Self-esteem Enhancement with Children and Adolescents. 高山 (監訳) 自尊心の発達と認知行動療法 — 子どもの自信・自立・自主性をたかめる — 岩崎学術出版社.
- Rogers, R.C. 1951 A Theory of Personality and Behavior. 伊藤 (編訳) ロジャース全集8 パーソナリティ理論 岩崎学術出版社.
- 白井利明 1992 登校拒否児に対する青年・大人・教師の認知の違い 教育心理学研究, 40, 1-9.
- 山中康裕 1982 問題児・問題行動論 山中 (編著) 問題行動 (所収) 日本文化科学社.
- 吉元 勇 1986 児童生徒の非行経験と非行への共感性について 広島文教教育, 1, 15-23.